

編集後記

『FAB』Vol. 3をお届けします。本号には、展示評や書評とともに3本の論文と1本の研究ノートが収められています。以下では、そのうち2本を紹介します。

巻頭論文の「衣服選択行動に関する一考察——パーソナルスタイリストのワードローブ調査をもとに」(松岡依里子)は、著者を代表とする共同研究「サステナブル社会の構築をめざした衣服選択研究」(2019-21年)の成果となる論文です。著者は近年問題視されているファッション・ロス問題を生産者ではなく消費者に注目してきましたが、本論文では一般消費者の買い物同行やコーディネートのアドバイスを行うパーソナルスタイリストたち4名のワードローブに注目し、そこから彼女たちによるファッション・ロス問題への貢献の可能性を探っています。

「高田賢三の緋柄ワンピース(1972年春夏)のデザインと構成」(小山有子・守屋孝典)は、インターネットオークションで入手した高田賢三の緋柄ワンピースについての考察です。文献資料を中心とする考察と複製制作(ラブオフ)から高田賢三の制作意図や当時の技術的な特徴を明らかにしています。前者から日本人としてのアイデンティティ表明の意図や日本文化の美しさの再認識を、後者から独自のデザインを工夫し従来とは異なる美しさについての模索を明らかにしています。本論文は、ファッション史を専門とする教員とデザイン画やパターンメイキングの指導に携わってきた教員との共同成果として注目に値します。

専門職大学のカリキュラムの要の一つに臨地実務実習があります。これは、文科省のホームページで「企業その他の事業の事業所又はこれに類する場所において、当該事業者の実務に従事することにより行う実習科目」(『専門職大学等の設置構想のポイント』)と説明されています。単位数が20単位以上と定められていることから多くの時間を実習に費やす必要があることがお分かりだと思います。今号では各キャンパスで実施された「臨地実習2」についての報告を掲載しました。関東や関西、東海の地場産業の実態に触れることで、学生たちは、日本のアパレル業界が直面している問題点や可能性を理解し、4年生で取り組む衣服の制作や論文執筆につながるヒントを得ただけでなく、卒業後の進路選択にも大きな影響を与えたのではないかと推察します。また、こうした実習に携わることで、教員たちにも教育・研究活動に結びつく新たな気づきがあったのではないのでしょうか。

本号では、新たな試みとして他に「革製品の作り手から見た良い革とはどのような革なのか——国内外の天然皮革の魅力について探る」(平井秀樹・捧恭子文責)という座談会の記録を掲載しました。柳町弘之、鮎澤剛、本学の捧恭子3氏が中心となって、現代における靴や鞆の制作について語っています。制作の過程だけでなく、あまり知られていない革の性質や流通などへの言及があり興味が尽きません。革製品は、動物保護という観点から厳しい批判に晒されてきていますが、この座談会を読むことで新たな視点を得ることができるのではないかと期待しています。ちなみに本号の表紙を飾っているのは、捧教授による、書道家とコラボレーションした靴2点です。

最後になりましたが、悲しいお知らせがあります。創設当初から本学の教育・研究方針に深く関わり、またそれ以前からも著作や指導を通じて本学教員に大きな影響を与えてきた菅原正博教授が2022年2月12日に85歳で逝去されました。本号には教授と長らく親交を暖めてきた7人の研究者による追悼文を掲載しました。

『FAB』第3号の発刊にあたって、企画室の渡辺生記氏には創刊号に引き続き表紙デザインやレイアウトをお願いしました。加えて執筆者の皆様、査読担当の先生方ら、多くの方々にお世話になりました。最後に編集委員会代表として感謝の意を表したいと思います。

『FAB』編集委員会代表・田中雅一

2022年10月31日